

## 第3章

# ザ・グレート・ゲームの激化

## イギリスの策謀とバラクザイ朝

### ドースト・ムハンマド・ハーンの台頭

アフガニスタンが動乱の渦中にあった時期、パイエンダ・ハーンの息子のひとりであり、モハンマドザイ氏族の有力者であったドースト・ムハンマド・ハーンが頭角を現し、1826年、戦略的都市ガズニーにおいて自らをアフガニスタンの支配者と宣言した。これが、アフガニスタン史上極めて重要かつ転換的な役割を果たすことになるモハンマドザイ王朝、すなわち一般にバラクザイ朝として知られる王朝の始まりであった。

ドースト・ムハンマド・ハーン、その兄スルタン・ムハンマド・ハーン・テラーイ、そしてその子孫の指導のもと、バラクザイ朝は2世紀にわたって数々の試練と変革を乗り越え、1973年の第1共和制樹立までアフガニスタンの政治的・社会的地形を形づくった。ドースト・ムハンマド・ハーンの血統は、19世紀の大部分と20世紀初頭まで統治を続け、アマーヌッラー・ハーンの退位によって終焉した。一方、スルタン・ムハンマド・ハーン・テラーイの子孫、すなわちナーディル・ハーンとその子ザーヒル・シャーが王位を継ぎ、共和国樹立までアフガニスタンを統治した。その影響力は1978年にザーヒル・シャーの従兄弟ダーウード・ハーンが大統領となるまで事実上続いた。

ドースト・ムハンマド・ハーンは物議を醸す人物であり、サドザイ族とバラクザイ族の間に深刻な敵意を生じさせた。彼の行動は、部族間抗争の中で兄ファテ・ハーンの残虐な殺害を招く結果となった。

### 第1次アフガン戦争

1839年から1842年にかけて行われた第1次アフガン戦争は、アフガニスタンにおける帝国主義的干渉の複雑さと危険性を典型的に示すものであった。この戦争は単なる軍事行動ではなく、19世紀の中央アジアでロシアの影響力を抑えようとするイギリス帝国とロシア帝国の間の地政学的競争、いわゆる「グレート・ゲーム」の一環であった。この戦争は、アフガニスタンの険しい地形を攻略する困難さ、そして独立心の強い国民性を浮き彫りに

した。

イギリスの目的は、彼らの利益に従順な統治者シャー・シュジャーを擁立することだったが、執拗な抵抗と内部の不満に直面して崩壊した。

ドースト・ムハンマド・ハーンは当初、ペシャーワル奪還のためイギリスに支援を求めたが拒絶された。その後、彼はロシアからの支援を模索し、1837年にロシアの使節ヴィトケヴィッチ大尉と会談を行った。イギリスは、ドースト・ムハンマド・ハーンのイランおよびロシアとの関係を自国の利益への脅威と見なし、軍事介入を決定した。

ドースト・ムハンマド・ハーンは当初、カーブル北方のパルワン州で英軍と戦うムジャーヒディーン勢力に加わったが、のちに夜陰に紛れて密かにカーブルへ戻り、英特使ウィリアム・マクナートン卿に降伏した。

インド総督府は、カーブルを支配下に置くための2つの戦略的選択肢を持っていた。すなわち、第1にシャー・シュジャーを傀儡王として擁立し、第2にドースト・ムハンマド・ハーンを保険としてムッスリームの宿舎に留め置くというものである。

1839年、ジョン・キーン將軍の指揮のもと、イギリスは2万人を超える軍勢を動員し、ドースト・ムハンマド・ハーンを排除してシャー・シュジャーを擁立する第1次アフガン戦争を開始した。シク王国の君主の支援を得て、オークランド卿は1839年にシャー・シュジャーをカーブル王位に復帰させることに成功した。

しかしシャー・シュジャーの統治は短命に終わり、1842年まで続いた第1次アフガン戦争は、イギリス軍に甚大な損害を与え、最終的にはシャー・シュジャーの暗殺によって幕を閉じた。

イギリス軍が屈辱的な敗北を喫し、シャー・シュジャーが殺害されたのち、オークランド卿は第2の選択肢に戻り、ドースト・ムハンマド・ハーンをカーブル王位に復帰させた。

カーブルに復帰したドースト・ムハンマド・ハーンは、英軍との同盟を主張し、第1次アフガン戦争で英軍撃退に貢献したアミヌッラー・ハーン・ログリ、アブドゥッラー・ハーン・アチャクザイらムジャーヒディーンの指導者たちを次々と殺害した。さらに、1841年に英特使マクナートン卿を殺害したことで知られる息子ワジール・アクバル・ハーンを毒殺した。

**ドースト・ムハンマド・ハーン第2の治世**

第1次アフガン戦争ののち、カーブルからの英軍撤退は壊滅的な結果となり、数千人の兵士と随行者のうち唯一生き残ったのは、ジャララバードにたどり着いた軍医ウィリアム・ブライドンただひとりであった。その後、アフガニスタンは大きな混乱と変革の時代を迎えた。

第2の治世において、ドースト・ムハンマド・ハーンは、反対勢力を排除したのち、自らの権力を固め、戦争によって荒廃した国の再建に力を注いだ。彼は行政改革を実施し、軍を強化し、そしてこの地域で影響力を競い合っていたイギリス帝国とロシア帝国の間で均衡を維持しようと努めた。ドースト・ムハンマド・ハーンはまた、アフガニスタン各地への支配を拡大しようと試み、長期にわたる包囲の末、1857年にヘラートをその支配下に置くことに成功した。

1855年、彼はイギリス代表ジョン・ローレンス卿とペシャーワル条約を締結した。この条約により、アフガニスタンと英領インドとの友好関係が樹立され、ドースト・ムハンマド・ハーンの特定期域に対する主権が承認された。

ドースト・ムハンマド・ハーンの外政方針は、イギリスとロシアの間で慎重に均衡を保ち、直接対立を避けながら、その対立をアフガニスタンの利益に転化するというものであった。

ドースト・ムハンマド・ハーンは1863年に死去し、地域・国際政治の複雑な力学を巧みに乗り越えてアフガニスタンの近代国家としての基礎を築いた賢明な支配者としてその名を残した。

### シャー・アリー・ハーンの即位

1863年にドースト・ムハンマド・ハーンが死去したのち、その息子シャー・アリー・ハーンが自らをアフガニスタンの支配者と宣言した。彼の治世は、国内の不安定と地域の複雑な地政学的環境に直面するものであった。シャー・アリー・ハーンは国家の近代化を試み、イギリス当局との融和的関係の構築を目指したが、当時の情勢のためにその努力はほとんど成功しなかった。

この時期、シャー・アリー・ハーンはロシア・トルキスタン総督カウフマン将軍と書簡を交わし、ストリエフ将軍をカーブルに迎え入れるなど、アフガニスタンに対するロシアの

関心の高まりを反映していた。1873 年の英露協定では、アフガニスタンを経済国家（バッファーステート）として承認したが、その国境線の詳細な画定はなされなかった。

ロシア使節団のカーブル駐在はイギリスを警戒させ、この地域における両帝国の戦略的競合をいっそう際立たせた。

グレート・ゲームが激化するなか、ロシアとアフガニスタンの外交的駆け引き——その一例がシャー・アリー・ハーンとロシア高官との交流である——は、イギリスにとって大きな脅威と映った。1873 年の英露協定はアフガニスタンを経済国家と位置づけたものの、ロシアの浸食に対するイギリスの懸念を和らげることはできなかった。この不安の高まりが緊張を激化させ、やがて第 2 次アフガン戦争勃発の布石となった。イギリスはこの地域での影響力を確立し、自国の利益を守るため、一連の行動を開始した。それは再びアフガニスタンを戦争へと引きずり込み、国の政治的構造を再び変化させることとなった。

## 第 2 次アフガン戦争

1878 年 11 月、イギリス軍のアフガニスタン侵攻およびカーブル占領によって、第 2 次アフガン戦争が始まった。イギリス軍の進撃に直面したシャー・アリー・ハーンは、ロシア帝国に支援を求め、イギリス軍事圧力への対抗を試みた。しかし、この支援要請は 1878 年のベルリン条約（露土戦争後のヨーロッパ領土問題を調整した条約）に続く大きな地政学的変化の中で行われたものであり、ロシアはより一層の軍事介入に消極的であった。最終的にロシアからの援助は限定的であり、シャー・アリー・ハーンは 1879 年、絶望的な状況の中でバルフにて死去した。

1879 年、シャー・アリー・ハーンの死後、その子ヤクーブ・ハーンがアフガニスタンの支配者となった。1879 年 5 月 26 日、ヤクーブ・ハーンとイギリス代表ピエール＝ルイ・ナポレオン・カバグナリ卿との間で締結されたガンダマク条約は、アフガン＝英関係史における重大な転機となった。この条約の下で、アフガニスタンは外交権をイギリスに譲渡し、一部の領土を割譲する一方、イギリスはアフガニスタンの防衛と安全保障を保証した。この取り決めは、特に対外関係においてアフガニスタンの主権を著しく制限するものであった。条約の押し付けとカーブルにおける英使節団の駐在は、アフガン国民の間で広範な抵抗を引き起こした。

英軍と内政両面の圧力に直面したヤクーブ・ハーンは、1879 年 10 月に退位し、イギリスによってインドに追放された。彼の退位によって短い治世は終わり、アフガニスタンは一時的に統治者不在の状態に陥った。その後、1880 年にイギリスは彼の従兄弟アブドゥル・ラフマン・ハーンをアミール（国王）として擁立した。

## アブドゥル・ラフマン・ハーン — 少数民族政策とデュランドライン協定

1880 年、イギリスの承認を得て即位したアブドゥル・ラフマン・ハーンは、アフガニスタン全土を中央集権的に掌握・強化するため、苛烈な統治政策を推し進めた。彼の治世は残酷な弾圧によって特徴づけられ、特に 1890 年代のハザーラ蜂起鎮圧における大量虐殺が知られている。また、アフガニスタン北東部のカーフィリスターン（現ヌーリスターン）を制圧し、現地住民を暴力的にイスラームへ改宗させたことでも知られ、この地域は 1896 年に完全に服属した。

1893 年、アブドゥル・ラフマン・ハーンはイギリス代表サー・モーティマー・デュランドと交渉し、いわゆる「デュランドライン」を設定した。

この協定により、英領インド帝国とアフガニスタンの国境が画定されたが、この線引きは今日に至るまでアフガニスタンとパキスタンの間で領土主権および部族の所属をめぐる争点となっている。

アブドゥル・ラフマン・ハーンは 21 年に及ぶ治世ののち、1901 年 10 月 1 日に死去した。

彼の治世は、アフガニスタンにおける権力の統合と中央集権化への努力によって特徴づけられている。死後、その息子ハビブッラー・ハーンへの権力移行は円滑に行われた。1871 年にサマルカンドで生まれたハビブッラー・ハーンは、父の手で将来の統治者として教育を受け、正式に皇太子に指名されなかったものの、包括的な訓練を受けていた。

ハビブッラー・ハーンの治世中、インド総督カーズン卿がアフガニスタンに対して要求を突きつけ、両国間の外交的緊張が生じた。これに対してハビブッラー・ハーンは、アフガニスタンの独立を主張する姿勢を示し、イギリス、フランス、ロシア、ドイツ、イラン、トルコ、アメリカ合衆国など主要諸国に大使を派遣した。

父とは異なり、ハビブッラー・ハーンの治世は比較的安定しており、国家の安全を脅かす重大事件は小規模な反乱を除いて発生しなかった。彼の時代は国内の秩序維持と対外関係の調整に努めた時期であり、アフガニスタン史において比較的平穏な時代として記憶されている。

バラクザイ朝の時代——すなわちドースト・ムハンマド・ハーン、シャー・アリー・ハーン、そしてその後継者たちの治世——は、アフガニスタンにとって変革と混乱の時代であ

った。「グレート・ゲーム」と呼ばれる地政学的チェスの盤上で、アフガニスタンはイギリス帝国とロシア帝国という2大勢力の間で翻弄され、第1次および第2次アフガン戦争が勃発した。これらの戦争と、アフガン支配者たちの内部改革および外交努力は、国家の歩む道筋を形づくり、近代国家としての基盤を築くことにつながった。